

複雑化する日本の安全保障



Vol.39
軍隊にとっての
新しい動き

米国に来ています。11月15日に首都ワシントンで開かれたGoogleのカンファレンスに出席するためです。政府や公共組織の活動をGoogleはどのように支援することができるか、というのが会議の趣旨なのですが、私の関心は登壇した米陸軍のCIOラジ・アイヤー博士の発言にありました。コンサルタント企業のデロイトで経歴を培った人が陸軍にどのような新機軸を持ち込む

かということを知りたかったのです。彼の考え方は至って分かりやすいものでした。

どのような状況にあっても、指揮官が正しい判断を下すためには正しい情報が手元になくはなりません。ですからそのために必要なシステムを構築しなくてはならないというものです。陸軍をデータ・セントリック、つまりデータを中心として動く組織に変えていこうというのが、彼が目指していることでした。

もちろん、このような方針を掲げることは決して彼が初めてというわけではありません。また、陸軍に特化した命題でもないと思います。言い換えればすべての組織にとって必要なことと言ってよいでしょう。組織を率いるリーダー個人の経験と資質に依存した独断や偏見を排除して、データに基づいた、他の人にも納得できる判断を下すようにさせるとともに、その過程と結論が他の人たちにも容易に理解できるようにするということになると思います。課題となるのは、この命題をどのようにして実行するのかにかかっているということでしょう。

彼が引き合いに出したのはウーバーでした。

これまでイエロー・キャブと呼ばれるタクシー専門の会社によって支配されていた米国の業界に、普通の人たちがドライバーとして参入することを可能にしたという現象です。もちろん既存の業界からは猛反対を受けました。それ以上にタクシーを利用する人たちから、今までのシステムよりも便利な配車のやり方が評価され、併せて一般市民にタクシー運転というサイドビジネスを安全な形で行う可能性ができたことから急速に広がり、一つの社会現象にまでなりました。このような営業形態が可能になったのは、コンピュータと通信の手段が発達したことにより、一般の人が客を乗せて運転することについて運転手と客の双方の安全と値段の透明性を確保することができるようになったからです。

アイヤー博士が目指したことは、彼が使った言葉をそのまま訳するならば「戦争をもとにした考え方からの脱却」といったようなものでした。そのための手段として提案していることは以下の4点です。

- (1) クラウドをベースにすること
- (2) データへのアクセスを容易にすること
- (3) AIやマシンラーニングを利用すること

- 用すること
- (4) ゼロトラストという環境を前提にすること

これまでの説明から(1)から(3)までの点はお分かりいただけるでしょう。データを集め、解析し、その結果を容易に手元に集めることができるようにする、という一連の作業を効率的に進めるための段取りを言っています。(4)については多少説明が必要でしょう。サイバースペースが進化していったことによつて、(1)と(2)の作業をする環境は急速に発達しました。そのことは同時に相手側からの攻撃を受けるリスクが大きくなったということでもあります。このため今後は予期することができない事態、あるいは奇襲攻撃を受けるリスクと言ってもよいかもしれませんが、そのような状況が起こったとしても被害を受けることがないような準備をあらかじめしておかなくてはならないということなのです。

もう一つ注目したい点は、彼が陸軍のCIOだということです。海軍や空軍と異なり、陸軍は最終的には兵隊一人一人が戦場で戦う最小単位

となります。つまり、データへのアクセスは、極端な場合には兵士のレベルにまで開かれていることが必要になる可能性があります。

この点については多少思ってもみない説明がありました。まず、今兵士として陸軍に入ってくる世代はデジタル・ネイティブだという事実です。つまりITを扱うことについては私などが想像するよりもはるかに慣れているということです。加えてそうした人たちが新しいシステムを利用することで経験の蓄積が急速に進みアップグレードを図る機会に恵まれるという側面が無視できないということもあり、陸軍という兵士個々がシステムを利用することが潤沢なフィードバックを保証してくれるという事実です。

もちろん、こうした新しいシステムの導入は具体的な作戦行動と並行して行われていきます。ロシアがウクライナへ侵攻したことにより、欧州に展開している米陸軍にはこうした事態に対応するための新しい任務が課せられることになりました。そうした任務付与と並行して新たなシステムの導入が部隊に対して行われていくのだそうです。

彼が今の仕事に着いたのは2020年だそうです。コロナ禍とウクライナの戦争、こうした極端な状況が新しいシステムへの要求と期待とを急速に高めたのでしょう。そして米陸軍がこうしたイニシアチブを取るということは、世界中の陸軍が目指すということでもあります。

新しい動きが何をもたらすのか、当分目が離せないことになりそうです。



西 正典
Masanori Nishi
1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループシニアアドバイザー。